

# 裸身の女仙

野村胡堂

青空文庫



## 綱渡りの源吉が不思議な使い

「姐御」

「シツ、そんな乱暴な口を利いてはいけない」

「成程、なるほど今じや三千石取のお旗本のお部屋様だつて、昔の積りじや罰が当らア」

芸人風の若い男は、ツイと庭木戸を押し開けて植込の闇の中へ中腰に潜り込みました。

迎えたのは、二十一二の不思議な美しい女です。

武家風にしては、少し派手なあかしちぢみ明石縮ゆかたの浴衣、洗い髪を無造作に束ねて、右手の団扇を

バタバタと、蚊を追うともなく、話し声を紛らせませす。不思議に美しい——と言ったのは、

決して無責任な形容詞ではありません。月の光と、縁に吊したつる灯笼とうろうと、右左から照らさ

れたこの女の顔は、全く、想像も及ばぬ不思議な美しさだったのです。首筋に束ねた髪は

燃え立つように赤い上、大きく波打つて、二つの瞳は碧海を切り取つたように碧く、上丈

は五尺二三寸、肌の色は、桃色真珠に血を通わせたような、言いようの無い美しさに匂う

のでした。

この一風変つた美しさを、人によつては、不気味と見る人もあるでしょうが、この邸やしきの主人あるじ、安城郷太郎あんじょうこうたろうは、又なきものに寵愛して、本妻の亡き後は、一にもお鳥とり、二にもお鳥、お鳥でなければ、夜も日も明けぬ有様だったのも無理のないことです。

「そんな嫌な事を言つておくれでない——、それはそうと、あれほど此邸このの側へも寄らないようにと言つて置くのに、何うして潜り込んで来たのだえ、源吉げんきち」

お鳥はたしなめるように、斯こう言い乍ながらも、幾年振りかで逢つた、一座の弟だゆう太夫、あの綱渡りのうまい源吉を、世にもなつかしく眺めるのでした。

「姐御、すまねえ、俺だつてこんな、泥棒猫見みたいな恰好までして、人の家へ忍び込み度くはねえが、二年振りで江戸へ歸つて来ると、矢も楯もたまらず姉御に逢い度くなつたんだよ」

源吉は、この二つばかり年上の美女を物悲しく見上げました。小さい時から一座に育つて、恋というにしてはあまりに親し過ぎる二人は、手を取り合つて心ゆくばかり話すか、それとも、二匹の犬つころのように、存分に喧嘩でもし度いような、悩ましい衝動をどうすることも出来ませんでした。

「皆みんな丈夫かい」

お鳥もツイ一足踏み出しました。張子の球にも鞆ぶらんこにも、手を組んで乗った源吉が、今でも親身の弟のように思えてならなかったのです。

「あ、親方も、お神かみさんも、一座の者は皆んな丈夫だよ。姐御が抜けてから、碌に目はないが、それでもまア、その日に困るようなことは無い。——ところで、三千石のお旗本のお部屋様になった姐御は幸せかい。親方は晩酌たびの度に、そればかり心配して居るよ」

「有ありがと難う、まア、此通り暮して居るから、仕合せと言うものだろうよ、不足を言えば限きりの無いことだから——」

「そうかね、その言葉の様子じや、あまり香かんばしい事も無なさ相そうだ、まア、辛抱しねえ」

「お前に意見を言われるようになったのかねえ」

「ヘッ、其その辺は矢張やっぱり昔の姐御だ、——尤もつともお月様の光じや、はつきり判らねえが、美しいことも昔の通りらしいネ」

「何をつまらない」

「ところで姐御、ツイ二三日前、両国の小屋へ、変な人が訪ねて来た」

「……………」

「五年越し、俺達的一座を尋ねて、日本国中を遍歴へめぐつたと言う若い浪人者だ。尤も、そう

言つたところで、親の讐かたきを討つわけでも、俺の綱渡りが見度いわけでも無い。手つ取り早く言えば姐御に逢つて、話し度いことがあるんだとさ」

「……………」

「おツ、ひどい蚊だ、すまねえが、庭石の上に腰を下して貰つて、その浪人者の話てえのを受うけもつ売り乍ら、一席やらかそう」

源吉は七三にからげた裾をおろして、脛から踵を包むように庭石の上に腰をかけました。その前にこれも中腰になつたお鳥、縁側の光から、源吉の姿を庇かばうように、団扇うちわを動かして、無意識に蚊を追い払つて居ります。

「ね、源吉、そんな浪人の話より、私は皆んなと一ひと眼逢い度いんだが、何なんとかならないものかねえ」

「おつと、そんな贅ぜいたく沢を言つちやいけねえ。一座とはすっかり手を切つた筈はずの姐御だ。よしんば今日の物に困るたつて、のめのめ顔を持つて来る親方じゃねえ、——それよりは今の浪人者だ、何どうしても姐御に逢わずに居られないから、ここ十日の間に、折を見て、雑司ヶ谷ぞうしがやきしもじんの鬼子母神様へお詣りをして貰い度い。小日向こひなたと雑司ヶ谷なら、遠いところでは無いし、御寵愛の籠の鳥でも、子宝を授けて貰い度さのお詣りとか何んとか、口実はどう

でも出来るだろう、と斯う言うのさ」

「――」

「――それでも疑念があるなら、斯う言つて貰い度い、そのお鳥殿とやらの、世にも不思議な素性が解つた――と、斯う言うんだ、大分變つてるじゃ無いか」

「それは、何んとかして出られない事はないが、何んな武家なんだい」

「嘘も偽も、悪巧みもあるような人柄じゃねえ、名前は萩江鞍馬、絵に描いたような好

い男だよ」

「萩江――鞍馬――知らないねえ」

二人は近々と、何時の間にかやら囁やき合う姿勢になります。

「不義者ツ」

不意に、恐ろしい一喝、縁側から怪鳥のように跳び降りたものがあります。

「あれツ、殿様」

「えツ、離せツ」

継り付くお鳥を蹴飛ばして、源吉を追つて、庭木戸の外へ。

相憎の月夜、五六間先へ、一散に逃げて行く源吉の後姿を隠す物の隈もありません。

## 年頃まで裸で育つた山の娘

お鳥は、その赤い毛と碧い眼が變つて居るように、世にも数奇すうきな運命もてあそに弄もてあそばれた女だったのです。

物心付いたのは、碓氷峠うすいとうげの奥、めつたに人も通わぬ炭焼小屋で、岩吉いわきちという、山猿のような男の世話になつて居る時でした。

世話になつて居る——というのは本当で、お鳥自身は何処どこで生れたか知りませんが、兎とに角岩吉かくの子で無かつたことは事実で、二人は、全く顔形かたちが似ないばかりでなく、岩吉は、山人の仲間でも評判の醜い独り者で、女房にようぼうというものを持つたことの無い男だったのです。

お鳥は、猿の子のように、一年の半分は裸体で育ちました。岩から岩へ、木から木へ、山の餌とを獵とつて、山の獣達と一緒に何んの苦勞もなく生い立つたのですが、髪かみの毛けが房ふさ々と延ひび、双ふたつの乳房ちちが、こんもり盛もりあがつて、四肢しに美しい皮下脂肪ひだじふちが乗り始める頃から、身を切られるような、恐ろしい羞恥しゆうぢに悩まされ始めたのでした。

岩吉は、ろくに着物を着せてはくれませんでした。海藻わかめを綴つづつたような、恐ろしい檻ぼろ樓



が、二三枚無いことはありませんでしたが、五月になるとそれを剥がれて、陽の当るうちは、岩の上でも、藪の中でも、赤裸で暮らさなければならぬお鳥だったので。

お鳥は時々谷川の水鏡を見て、次第に美しくなつて行く自分の肢体からだと、山人達や、たまに里から来る人間と自分との間に、恐ろしい差さしちがい違ちがいのあることを覚り始めました。赤い毛、碧い眼、円まるい滑らかな顎、伸のび々した四肢、美しい皮膚など、岩吉はもとより、此辺で見かける人達とは、まるつきり違つたものです。

もう一つ、お鳥の悩みは、自分を育ててくれた岩吉の態度が近頃すっかり變つて了しまつたことでした。五月から十月迄まで、陽のあるうちは、着物を着せてくれないのは昔からで、別に不思議も何にもありませんが、お鳥の行く先々へ、執念深く付き纏まとう岩吉の眼の色が、今まで経験したことも無い、不思議な光を帯びて来るのが、お鳥に取つては、何よりも我慢の出来ない圧迫でした。

「着物を着せておくれよう」お鳥は時々そんな事をせがみましたが、

「うんにや、ならねえ、若え者が今のうちから着物を着たら、冬になったら、何どうするだ」岩吉の調子には、一縷いちるの妥協性もありません。

それでも、昼は大したことはありません、が、同じ小屋の中に眠る夜は、お鳥に取つて

は、たまらない嫌悪でした。本能的な不安の中にも、疲れと若さに誘われて、ウトウトと寝付くと、岩吉の毛むくじやらかな手が、お鳥の腕を押えて居たり、岩吉の髭ひげづら面が、お鳥の頬とすれすれに、息と息とが絡み合つて居ることさえ稀では無かつたのです。

お鳥は驚いて飛とび起おきました。夜が明ける迄は一寸ちよつとも小屋の外へは出してくれません。何べんか、里へ逃げ出そうとしましたが、裸体では何どうすることも出来ず、それに岩吉は口癖のように、

「お前が里へ出たら、一ぺんに打ち殺ぶされるぞ、間違つてもそんな気を起すな」

と言う言葉に脅やかされて、何辺か思い立つては、果し兼ねていたのです。

併しかし最後の時は来ました。ある夏の夜、岩吉の執拗わづな悪戯わざは、到とう頭とう、山の処女の恐怖を、腹の底から揺り覚さしました。

お鳥はその時、十五か、精せい々ぜい十六じゅうだつたのでしよう。我慢の出来ない岩吉の腕から脱ぬけ出すと、漆のような闇の山路を、全く当もなく駆けて出たのでした。

五十両の手切れでお鳥は旗本へ

その晩、信州路を廻つて、散々の不入に悩まされた軽業かるわざの一座が、安泊りに入る路用もなく、碓氷峠の出口に、古ふるのぼり幟ぼりを天幕にして、馴れた野宿をして居りました。

峠には、時々狼が出て、旅人を悩ました時代です。野宿の軽業一座は、夜通し火を焚いて、交かわる番人がわを置きましたが夜中から暁あけがた方かけて、焚火を見張らされたのは、一座の花形で源吉という綱渡りの少年でした。

ツイ、うとうととした眼を開いて、夜の明けるまで、もう一と焚き——と立ち上ると、  
「あッ」

眼の前へ、赤い毛をした、裸形の娘が、人懐かしそうに立っているではありませんか。

「親方、た、助けてッ」

二度目の少年の声を聞くと、親方の源げんだゆう太夫を始め、二三の屈強な男が、手廻りの得物を携えて飛出しました。

が、焚火の前に、しよんぼり立っているのは、妖怪変化でも山の狼でもなく、一糸も纏わぬ処女——神こうこう々しいばかりに美しいのが、碧い眼を据えて、物に驚く風情に、ジツと此方こちらを見詰めて居るのでした。

話せば、長くなりますが、——こうしてお鳥は、源太夫の一座に拾われ、言葉と、芸と、

いろいろの智慧を仕込まれて、一年の後には、一座の花形、鳥太夫と名乗って舞台に立つて居たのでした。

それから三年経ちました。

ふとした事から、お鳥の異国的な美しさを見た、三千石取の旗本、安城郷太郎と言う中年の武家が妻を喪<sup>うし</sup>なつたばかりの淋しさもあつたでしょう。恐ろしい熱心で、——お鳥を懇望したのです。

源太夫は根気よく断りました。「碓氷の山で育つて、礼儀作法も弁<sup>わきま</sup>えず、武家奉公などは思いもよらない」と言う口実で、人橋を架けての望みを突つ返しましたが、「行儀作法はこちらで仕込む、見事一年と経たぬうちに、武家の家風を教えて見せる」という調子で、何んとしても諦めません。

結局は、刀で脅かされて、折から御難続きの源太夫に、手切れともなく五十両の金をやり、一切の縁と関係を断つことにして、安城郷太郎の妾<sup>めかけ</sup>として引取<sup>ひきと</sup>られたのでした。お鳥はその時十九、

「此後、如何<sup>いか</sup>なる事があつても、出入はならんぞ、一座の者にも、よく申<sup>もうしつた</sup>伝えて置け、道で逢つても挨拶をしてはならん」

斯<sup>こ</sup>う言う郷太郎の言葉に反<sup>そむ</sup>いて、弟分の源吉が、久し振りに江戸へ帰つて来ると、浪人者——萩江鞍馬に頼まれた用事を口実<sup>くじつ</sup>に、昼のうちに、結び文<sup>むすびぶん</sup>を礫<sup>つぶて</sup>と一緒に投<sup>ほう</sup>り込んで、そぞろ歩きのお鳥に拾<sup>ひろ</sup>わせた上、夜になるのを待ち兼ねて、小日向の邸の中に潜<sup>ひそ</sup>り込んだのでした。

## 成敗は斯うと降り注ぐ唇の雨

「お鳥、来い」

大<sup>だい</sup>日<sup>にち</sup>坂<sup>ざか</sup>に駈<sup>か</sup>け登<sup>のぼ</sup>つたらしい安城郷太郎、焰<sup>ほのお</sup>のような息をお鳥に吹き掛けるとむんずと、手を捕<sup>とら</sup>つて庭口へ引<sup>ひ</sup>入<sup>い</sup>れました。

「あッ」

「驚<sup>おど</sup>くなお鳥、相手は盗賊として斬<sup>き</sup>り、町役人に引<sup>ひ</sup>渡<sup>わ</sup>したぞ、見<sup>み</sup>度<sup>ど</sup>くば見<sup>み</sup>て来<sup>き</sup>るが宜<sup>よろ</sup>い」

「……………」

「ところで、今度はお前の番だ、どんな成敗をしたものであろう、望<sup>のぞ</sup>を言<sup>い</sup>えッ」

郷太郎はお鳥の身体<sup>からだ</sup>を突<sup>つ</sup>つ放<sup>はな</sup>すと、沓<sup>くつ</sup>脱<sup>ぬぎ</sup>の上へ、ハタと蹴<sup>け</sup>飛ばしました。

「殿様、お間違いなさいますな、あれは、あの男は、源吉でございます」

お鳥は起直おきなると、必死ひつしと、郷太郎の裾すそに絡からみ付きました。

「何？ 源吉」

「ハイ、あの軽業一座の源吉が、久し振り江戸へ帰って、皆んなの代りに逢いに来てくれたので御座います」

「源吉なら、なお悪い、長く一緒に居ただけに、疑念も一としおと言うものだ。それに、あれほど言つて置いたでは無いか、源太夫を始め、一座の者と、往き来はならん」と

郷太郎もさすがに予想外のようにでしたが、源吉と聞いて怒りは少しも納まったわけでは  
ありません。

「可哀そうで御座います、殿様、源吉は何んにも存じません」

「黙れッ」

「……………」

「庭口から忍び込んで女と曝き交して居る者を潔白と言えるか、第一、お前の心掛が悪い」

「ハイ」

「二年越行儀作法を仕込んで居るのに、まだ武家の家風を吞込のみこめぬとは、何んとした白痴たわけ」

だ。裸体で碓氷の山の中で暮した時とは違う」

「……………」

郷太郎の舌は辛辣に動きますが、お鳥は沓脱の上に崩折くずおれて物も言いません。

「軽業の一座で、その赤い髪の中に銀色の角を植え、裸体になって、鬼の真似まねをして居た其方そなたを、引取つてやったのは誰の恩だ」

「……………」

「せめて人がましいい心構を覚えさせたさに、二年間の骨折で彼れか此れこと仕込んだでは無いか、それに何んだ」

「……………」

「武家の妻も同様の其方そなたが、若い男を引入れて、庭の木蔭に囁き交すとは何事だ」

「……………」

四十男の嫉妬は、煮えた油のように執拗こわばでした。少し不養生らしい蒼い顔が、憤怒と月の光に、物凄く硬張こわばつて居りました。

「さア、成敗して取らせる、それへ直れ」

「殿様、それは、それはあんまりで御座います」

お鳥は漸く顔を上げました。此世のものとも思えぬ美しい顔が半面青白い月を浴びて、碧い眼がポロポロと泣いて居ります。

「何があんまりだ、お前のようなものを教え込もうと思ったのが間違いだ、山猿の子は矢張り山猿だ、それへ直れ」

邸の中は無人の境の如く誰も外へ出て止めようとする者はありません。主人の日頃の気象しやうを知り抜いて居る上、溺愛されるお鳥に対して、蔽おほうことの出来ない反感が、用人から端女はしたの末まで行いきわた亘わたって居る為でした。

「殿様」

「覚悟は宜いな」

郷太郎は二度太刀を振り冠かぶりましたが、紅い唇、白い喉、碧い眼の、言いようもない魅惑的なお鳥の顔に逢うと、二度とも刀をおろして、息を継ぎました。

「殿様」

「よしッ、お前の成敗は、外ほかに術すべがある。来いッ」

刀をピシリと鞘に納めると、前屈みにお鳥の脇へ両手を入れて、五尺三寸あまりの美女を、いとも軽々と抱き上げました。



不思議な弾性を包んだ、柔軟な身体からだが、郷太郎の腕の中にムズムズと動くとき、  
「不届な女だ」

お鳥の顔へ唇の雨を降らせて、郷太郎はサツと奥へ、女を抱いたまま消え込みました。

### 油絵の具で描いたお鳥其儘の姿

お鳥は十日待ちました。

その間、一寸も外へ出る暇が無かったのと、郷太郎の愛撫——、源吉を斬って以来、油を注いだように猛烈になつた愛撫から、遁のがれる途みちも無かつたのです。

それに、お鳥の様子——、赤い髪と、碧い眼が、天明年間の江戸の街には、あまりに目立って、頭巾かぶを冠きせつる期節きせつでもなければ、うっかり外へも出られなかつたのでした。

若もし、源吉が無事に逃げ延びたら、鬼子母神の茶店で待つと言う、若い浪人者とかの話は、そんなにお鳥わすらを煩わづらわさなかつたでしょう。が、命がけで、そんな事を教えてくれた源吉が、野良犬のように斬られて、悪名まで被せられたことを考えると、何どんな事をして、鬼子母神で待つて居るといふ浪人者に逢つて五年の間、自分を捜し廻つたといふ用事や、

自分の素性の事を聞かずには居られないような心持になって居るのでした。

暑い日の昼下りから、紺色の日傘に、赤い髪を隠したお鳥はお石いしという腹心の下女を一人伴つれて、雑司ヶ谷の鬼子母神の境内へ入って来ました。

「あ、御新造様、あれは何んで御座いましょう」

お石の頓狂な声に驚かされて、石畳の上にお鳥は立ち止ります。

「あッ」お石に指さされて、一と目、お鳥も立ち竦すくみました。

右手の茶店、名物芋団子やら、焼鳥やらを食わせる家の、奉納の手拭の幾本かブラ下つたあたりに二尺に一尺五六寸の、今まで見たことも無い、不思議な絵がブラ下つて居るのです。

油絵の具で描いて、唐紙模様を彫んだ広い縁の額に入れた絵——それだけでも充分変つて居るのに描かれた絵というのは、赤い髪、碧い眼、鼻が高く、顎の円い、お鳥そつくりの女、羽根のような白い着物を着て、紅い唇が、ほのかに微笑ほころびかけて居る様子まで、お鳥そのままの美しい姿だったのです。

「これは、御新造様の絵姿じや御座いませんか、何どうしてこんなところに——」

お石はあまりの事に眼を丸くして、釘付けになつて了しまいました。油絵などは、切支丹きりしたん

の踏絵より外には見ることに無い時代、茶店の店先に、鏡に映したような、お鳥の肖像があつたのですから、これに驚かなければ何うかして居ります。

「石、其処そこの店で訊いておくれ、これは何うした絵で御座いませうか——つて」

「気味が悪う御座いますネ、御新造様」

「それじゃ私が訊いて見よう」

「あれ、そんな積りじや御座いません」

お石が入つて訊くまでもありませんでした。お鳥の変つた顔形を見ると、茶店の婆アは心得顔に、

「御新造様、お鳥様と仰おつしゃいましたな。萩江様が十日も前から毎日毎日お待ち兼ねで御座います」と、奥を指さします。

「お石、ほんの暫しばらく此処ここで待つておくれ、誰か知つてる人が見えたらそつと教えてくれるように」

「宜よろしゆう御座いますとも、御新造様」

心得顔なお石を店に残して、お鳥は茶店の老女の案内するまま、薄暗い別間へ通りました。

「漸つとお見えになりました、旦那様」

「お、それは有難い」

婆アの声につれて、窓際から身を起したのは、二十八九の立派な武士、越後上布に、白博多の帯、一刀を提げて起つと、長押に鬚の刷毛先が届きそうな堂々たる体軀で、浅黒い顔は日焦けのせいでしょう、にっこりすると淋しさのうちにも、顫いつき度いような愛嬌があります。

「さア、御新造様、お通り下さいまし、旦那様は今日で十日、明けの六つから、暮れの六つまで、この暑いのにこんな場所で、根気よくお待ちになりました。他から拝見しておいたわしいようで、何辺かお諦めなさいますように申上げましたが、十日目にはきツと来ると仰しやつて、一刻も此処をお動きになりません。あの通りお痩せになつて」

「まア、宜い——、お鳥殿お通り下さい。拙者は萩江と申す浪人者、斯様な場所へ御案内申すのが、道に外れて居ることも、御迷惑なことも万々承知し乍ら、何んとしても、一言申上げ度いことがあつて、諦め兼ねました」

「……………」

お鳥は思案に暮れて、部屋の入口に蹲まりました。入ったものか、逃げ帰ったものか、

全く分別が付かなかつたのです。

が、四角几帳面な浪人の言葉と、その端麗な顔を見ると、どんな警戒も、ほぐれるように解けて了しまつて、側へ行つて聞くだけの事を聞いてしまい度いと言つた、わけも無い衝動に駆られるのでした。

「お鳥殿、何より先に、父上の伝言を申上げ度い——」

「私の？」

「左様、お鳥殿の父上は、藁のうちから捨てたことを、どんなに後悔して居ることか——、唯ただいま今、店先で見られた絵姿をたよりに、万に一つ拙者の手で探し当てたなら、直すぐ様知らせてくれるようにとくれぐれも仰おつしやつたが」

「私の父親は、何処どこの、何んと言う者で御座いましょう？」

「それが、お鳥殿、風の便りに聞くと、一年ばかり前に亡くなられたとの事じゃ」

「えッ」お鳥も妙な惑乱を感じますが、が、凝じつどころえて、浪人の顔——妙に思い詰めた真剣な顔を仰ぎました。

「今となつては、お鳥殿の身の秘密を知る者は、広い世界にも拙者より外には無い。礼儀にも道理にも無いことではあるが、源吉に頼んで、あの言ことづて伝を申し上げたのは、斯こうし

たわけであつた」

「その秘密とやら仰しやるのは何んで御座いましょう、——あの店先の絵姿は誰で御座いましょう、私で無いことは解り切つて居りますが、若しや——」

お鳥は息を呑みました。若しや——それは自分の母親か、又は姉だったかも知れないのです。

「それを申上度さ、それにお鳥殿に逢い度いばかりに、五年の間、岩吉という木樵きこりを尋ね、源太夫という軽業師を尋ねて、中仙道から、北陸、東海道は申すに及ばず、京へも大阪へも、奥州までも経廻りました」

「……………」

「いや、手前の骨折などを吹聴する積りは毛頭ない——が、話の序ついでに、思わぬ愚痴になりました。旗本、安城家へお入りと聴きましたが、斯様な話を正面から持つて行つても、誰も信じてくれそうは無く、それに、安城殿はこの外潔癖けつぺつだそうで、源吉を頼んでやるとあの始末だ」

お鳥も暗然としました。弟弟子の源吉の死が、また擦くすぶるように涙を誘います。

「萩江様、何んと申上げて宜しいやら、いろいろ御骨折、有難う御座います。そうまでし

て下さる貴方様は何んなお方で入らっしゃいますよう、せめて御身分をお明かし下さいまし」

「西国の浪人、萩江鞍馬、それ以上は申上げようも無い。軽井沢でお鳥殿の父上にお目にかかり、此店先に掛けてあつた絵姿を手に入れて、拙者は斯うするより外には工夫も無かつたのだ。お笑い下さい。武芸の修業でもあることか、一婦人を尋ねて、五年越日本中を遊歴した私は、武士の端くれを汚すさえ後ろめ度い——、何事も、前世の約束事であろう、お鳥殿」

鞍馬は斯う言つて、端麗な顔を俯向けました。

言うことは筋も意味もありますが、美しい絵姿に魅入られて、同じ顔形の人を探そうとした、果敢なくも熱烈な恋心は、お鳥の胸にも犇々と喰い入ります。

「何んと申上げて宜いのやら、私には解りません。それにつけても亡くなった私の父親の名と、私の素性を、どうぞお教え下さいまし」

「他聞を憚る事、暫らくお待ち下さい」鞍馬は立ち上つて、簾の外、夕陽にキラキラする石畳の上を見ましたが、ハツとした様子でお鳥を顧みしました。

続いて店からお石の声、

「御新造様、殿様が入らつしやいます」

「あッ」お鳥も驚いて、遽にわかに店口に飛出しました。

この時石畳を踏んで、鬼子母神の境内へ入つて来たのは、安城郷太郎の忿ふんぶん々たる姿。その後には日頃お石と仲の悪い下男しかぞうの鹿造が心得顔にニヤリニヤリと従つて居るのです。

## 山の女は反逆する

「女、何処どこを歩いて来た」

邸へ帰つて縁側に掛けたままの安城郷太郎、振り返つてお鳥に日本一の苦い顔を見せま  
す。

「ハイ」

「ハイでは無い、鬼子母神の茶店に居たのは、ありや何なんだ」

「……………」

「どんなに作法や、人の道を仕込んでも、お前は矢張り山猿の子だ、今度は許さんぞ」



「……………」

「石は今日のうちに暇を取らせる、お前は、お前は」

郷太郎は考え込みました。この素晴らしい玩具おもちゃを壊さずに、存分に思い知らせる仕置は無いものか——を思い煩って居るのです。

「殿様、あのお武家は、私の父親の言伝を持つて入らっしゃいました。決して、決して」  
 「黙れ、お前の父様は碓氷峠の猿だ、——そんな甘手に乗る俺と思うか」

足を挙げてハタと蹴ると、お鳥の身体からだは庭へ、毬の如く転げ落ちたのかと思うと大違い、  
 「ホ、ホ、ホ、殿様、御冗談が過ぎます」

縁側の上から、素晴らしい嬌笑を浴せるのはお鳥で、庭の芝生に尻餅を突いたのは、外ならぬ主人の郷太郎自身だった。

「無礼な女奴めツ、其処そこ動くなツ」

郷太郎は飛起きると、縁側の一刀を掴みに行きましたが、お鳥は早くも飛付いて、座敷の中へパツと投げ込みました。

「殿様、作法の仕込みのと仰しゃいますが、それが、三千石の大身の躰たしなみでいらっしゃい  
 ましょうか。少し静かに、私の言う事も聞いて下さいまし」

「何を申すツ」

郷太郎は、女の言葉を耳にも掛けませんでした。

刀を取り上げられたムシヤクシヤも手伝つて、大手を拵げて、ガバと組くみ付くのを、かいぐぐつたお鳥の双腕は、もう一度郷太郎の胸をドンと突くと、三千石の御大身ともあろうものが、他愛もなくよろけて庭石の上へ、したたかに尻餅しまたを突いて了しまったのです。

「ホホホホホ、まあ弱い殿様」

「えッ、己れッ」

郷太郎は煮えこぼれそうに腹を立てましたが、何なんとしても腰が切れません。

お鳥は十五六まで、碓氷の山奥に育つて、猿や鹿を相手に、木から木へ、岩から岩へと飛んで歩いた上に、軽業の一座に交つて、三年の間身体からだを練つた女です。

打物業うちものわざにさえならなければ、妾狂いに浮身をやつす安城郷太郎などの手に負える女ではありません。

「殿様、このお鳥を馬鹿に遊ぶのは宜しゆう御座います。山猿と一緒に育つたことも、銀の角を生やして、裸体はだかになつて飛廻つたことも嘘とは申しませんが、何んの罪もない源吉を殺したり、私の親の悪口を仰しやつては我慢まゐがなりません」

「何？」

お鳥の言葉は、切々として肺腑に喰い入りますが、郷太郎は起き上られぬまま、負け惜みの眼ばかり光らせます。

「私は言わば金で売られた身体からだで、三代相恩の家来でも、殿様の奥方でも御座いません。二年越しのお仕込みはお仕込みとして、この上我慢がなりましようか」

「……………」

「私はもうお仕込を頂かなくとも宜しゆう御座います。此場から御暇を頂きます、殿様、そんな顔を遊ばすものでは御座いません」

「無礼者ツ」

「女から愛憎あいそ尽かしをすると、下々の者は、もう少し潔いさぎよい事を申します。殿様、もうお目にはかかりません」

「待て、待て女」

安城郷太郎の声を背後に聞いて、お鳥は立ち上りました。

「こんな窮屈なところに居るより、私は矢張り碓氷峠へ帰って、裸はだか体で暮らしましょう。お友達だった猿や鹿が、まだ何匹かは生きて居ましよう」

涙ぐましい声になって、つと立ち上ると、何時の間いつに忍び寄ったか、後からガバと組付いたのは下男しもやうの鹿造、

「何をするのさ、いやらしい」

身を沈ませて、大の男にもんどり打たせると、

「えッ、神妙にせえ」

前から用人、六尺の手槍をピタリと付けます。

### 駕籠に乗せて女を信濃路へ

「お女中、何処どこへ行かれる」

「あッ、旦那様、大変なことになりました」

お石は往来に立ったまま、手離しで泣き出しました。呼び止めたのはこの暑いのに、深編笠で面体を隠した武士、言うまでもなくそれは、萩江鞍馬の世を忍ぶ姿でしょう。

「御新造様は、殿様のお怒りに触れて、浅ましく縛られたまま納戸なんどに投り込まれて、窮命きゆうめい中で御座います」

「えッ」

「私は昨日のうちに暇が出ましたが、朋輩衆の取なしで、一日だけ延して頂き唯今宿元へ下るところで御座います。私はどうなつても構いませんが、御新造様がお可哀そうで――

――

「これこれ、往来で泣いては人立ちがする、ところであの、お鳥殿を救い出す工夫はあるまいか」

「飛とんでもないこと――、御新造様は今晚、御領地の信州へ、通し駕籠かごで伴つれて行かれ、一生其処そこへ押籠おしこめられるので御座います」

「えッ、それは本当か」

「嘘なら宜しゅう御座いますが、旦那様」

お石は四方構あたりわず泣き出してしまりました。音羽の森に夕づく陽が、この一克者らしい娘の襟に射して、妙に涙をそそる情景です。

鞍馬は、何程かのお鳥ちようもく目を娘に握らせて、其儘宿そのままに飛んで帰りました。

慣れた旅支度と言つても夕景まで手一杯に急いで、小日向の安城邸に駈け付けたのはもう戌刻いっつ(八時)少し前、夏の日もすっかり暮れ切つて、忍びの旅立ちには丁度ちようど宜い頃合

でした。やがて、門を出て来たのを見ると、駕籠が二挺、一つはお鳥の捕われの姿で、一つは、主人の郷太郎でしょう。それに用人、仲間、草履取まで一行八人、さすがに大身だけ警固に一分の隙があろうとも思われません。

特に用人 おぼたとうざぶろう 小畑藤三郎は、中年者乍ら槍の名人、道中は長物を憚って、袋のままの手槍 びしゃもん を毘沙門突きに、大きい眼を四方に配ります。

門を出ると直ぐ――。

「小畑、先程も申す通り、万一 くせもの 曲者に出逢ったら、其方は先ず第一にその槍で、女の駕籠を刺すのだ。間違つても、曲者に向つてはならぬぞ」

先の駕籠から斯う声 こ を掛けたのは、言うまでもなく安城郷太郎、お鳥を狙う者のあるのに、薄々気が付いたのでしよう。

萩江鞍馬は、分別もなく、一行の後を追いました。

泊りを重ねて、碓氷へかかったのは、それから四日目、安城郷太郎の一行は、日の暮れたのも構わず、峠道へ――、傍目も振らずにかかりました。

「近頃、峠へ千足狼が出るぞ、危ないことだ、泊って行かっしやい」

そう言ってくれる里人の注意を聞流 ききな して、何処 どこ かと言えは臆病な安城郷太郎が、夜の

山道へ駕籠を入れたのは仔細あり気です。

## 千疋狼の餌に裸女を山へ

「女、お前の故郷に來たぞ、降りろ」

郷太郎は駕籠からお鳥を引出させました。

「殿様」

お鳥は思わず声を立てました。少しやつれては居るが、相変らずの美しさ、

「お前の顔を見ると、未練なようだが、俺は斬られなくなる。そこで、領地へ用事で帰る序に、お前を故郷へ帰そうと思つて伴れて來たのだ」

「……………」

郷太郎の殘虐な目論見が次第に判つたものか、お鳥はぞつと身を顫わせます。

「お前は、此碓氷峠で育つた相だ、しかも裸体で——」

「……………」

「裸体で此山から出たお前を、裸体で此山へ歸す——、俺の仕事はそれで済む。その上、

里で聴くと近頃此峠へ千足狼が出るそう。それも、お前の昔馴染なしみだろう。夜と共に吠え明かせ、ハツハツハツハツ」

苦い笑が、郷太郎の頬を痙攣けいれんさして、洞ろうろな声が、夜の林にカラカラと木精こだまします。

「えッ、畜生ッ」お鳥は齒を食いしりましたが、此処ここまで運んだ郷太郎の悪戯いたづらを、思い止まらせることなどは出来そうもありません。

「何んか、遠くの方で、変な声がするようだ。狼に出られては迷惑だ。急げ鹿造」

「へエ」

鹿造は、お鳥を引立てると、手近の立樹の幹へキリキリと縛りました。

「それでよし、サア、引揚げろ」

そう言い乍ら郷太郎は駕籠へ入ると、もう一度振り返って、

「お鳥、故郷の月は格別だろう、お前の友達の吠える声も次第に近くなつたぞ」  
捨すてぜりふを残すと、駕籠を促して里の方へ、一散に駆け降ります。

それから狼の大群の近づくまで、ほんの四半刻もかかりませんでした。

夜空に籠うなつた陰惨な喰りに、お鳥はハツと首を挙げると、縛られた大樹を繞めぐって幾百の光り。



それは、お鳥の匂いを嗅いで集った、千足狼の血に渴く眼だったのです。

「……………」お鳥は凝つと唇を噛みました。山で育ったお鳥はこの悪獣の貪婪な食欲と、執拗極まる性質を知り過ぎるほど知って居たのです。

「……………」

お鳥は黙って、八方に眼を配りました。縛めさえ脱げば、逃れる道もあるでしょうが、何んなに意地悪く縛ったものか、あせればあせるほど縄目が喰い込んで、月の光の下に、豊満な肉塊が、ただピチピチと蠢めくばかりです。

そのうちに、四方から囲んだ狼の壁は、五寸ずつ一尺ずつ輪を狭めて、一番先に立った灰色の親狼は、お鳥の目の先から三間ばかり、火のような眼をキラと光らせて、物を狙い撃つ恰好に、カツと赤い口を開きました。

続いて、幾十、幾百の悪獣は、圧迫的な、いやらしい唸の合唱を挙げて、四方から、恐ろしい力で圧倒します。

「た、助けて——」

お鳥は、初めて悲鳴をあげました。

「萩江様——、鞍、鞍馬様——」

もと  
素より萩江鞍馬が、其辺に居ると思つたわけではありませんが、五年間自分を尋ねてくれたと言う純情的な武士の名が絶望的なお鳥の唇へ、フツと蘇返よみがえつたのです。

それと同時にした。

真つ先の狼がサツと跳んでお鳥の肩へ、

「あッ」

その時遅く、礫のように飛んで来た一人の武士、狼の首筋をサツと斬り払うと、お鳥を後ろに庇つて身構えました。

「お鳥殿、もう大丈夫」

「アッ、萩江様」

お鳥は夢のような心持で、救いの神の若い武士を見上げました。

「お鳥殿、危いことであつた」

そう言い乍ら萩江鞍馬は、狼の大群の中へ、刀を舞わしてサツと飛込みました。又二三疋は斬られた様子、悪獣のたじろぐ隙に、お鳥の縄を切り解いた鞍馬は手を取つて側の大木へ――。

## 祖先の血が通うムリロの名画

木の上へ、お互の身体からだを梯子はしごにして登ろうとした千匹狼は、鞍馬の為に、何十匹斬られたかわかりません。

悪闘の一刻悪獣の群もさすがに少し身を引いて、遠巻きに樹上の二人を見上げました。鞍馬とお鳥は、それでも、いくらかずつ落付おちつきを取返とりかえして、やがて、平静な心持で話し会うあようになると、何より先に、お鳥の豊満な裸体、月の光にさらされて、ほんのり霞かすむような美しい身体からだが気になります。

「気持が悪くなかったら——」

萩江は振り分けの中から、着換の単衣ひとえを出して、そつと、その肩へ掛けてやりました。

「……………」黙って俯向くお鳥の目には、もう涙さえ浮んで居ります。

「お鳥殿、いつぞやは、申上げる程のことも申上げなかつた。——狼は急に飛び付きもすまい、此処ここでお話いたそうか」

「どうぞ、萩江様」お鳥は鞍馬へ差し寄るように、委ね切った心持で、見上げました。

「五年前——、祿を離れて、軽井沢の獵師、三五郎さんごろうと言う者の家に厄介になって居る時、

フトした事から、あの絵姿を見付けたのが始まり、恥かしい事だが、何うしても忘れられなかつた——」

萩江は斯こう言う調子で語り進みました。獵師三五郎に聞くとそれは百年も前から家に伝わったもので、スペイン国のムリロと言う名人の描いたもの、ポルトガルの船乗りが、難破して清水港に着いた時持つて来たのだということです。

ポルトガルの船乗りは間もなく死んでしまいました。が、その種は日本に残つて、三五郎の家には三代に一人位、赤毛碧眼の子供が生れることがあります。今で言う間かん歇けつ遺伝ですが、当時はそれを懼おそれ憚はつて、三五郎の親の代に軽井沢に引込み、山狩りを生業に細々と暮して居りましたが、何んの因果か、三五郎の女房も、異人の上陸と、切支丹禁制のやかましい時も時、人交りもならぬ紅毛碧眼の女の子を産うんで了しまつたのでした。

女房が産後の肥立ちが悪くて死んだ後、この異形の子を育てる気力もなく、三五郎は心を鬼に碓氷峠に捨てたのです。萩江鞍馬が三五郎の家へ行ったのは、それから十何年目、ふと見せられた船乗りの母の若い姿を描いたという、油絵の美しさに魅せられて、それとそっくり同じであつたという、三五郎の娘の行方を探し出そうと決心したのでした。

炭焼きの岩吉が十六まで育てたことはすぐわかりましたが、軽業小屋に逃げ込んでから

先が判らない為に、三五郎から申受けた油絵を抱いて、五年越し、鞍馬は見ぬ恋にあこがれの旅を続けた末、フトしたことから、江戸で一座にめぐり逢い、お鳥は、旗本安城郷太郎の妾になつて居ることまで突き止めたのは、ツイ半月前のことだったのです。

「斯こう言うわけだ、お鳥殿、その美しさに、ポルトガル国の船乗りの血を引いて居る為、いろいろの禍わざわいが後からあとと起つたのであらう。——併し、もう大丈夫、及ばず乍ら、この萩江鞍馬がお力になつて、山の中から、街の中から、好みの場所に、安穩に送らせて進ぜよう、お鳥殿」

お鳥は、あまりの事に、暫らくは言葉もありませんでした。が、

「有難う御座いました。五年間もお探しなすつた上、危い命までお助け下さつて、お礼の申上げようも御座いません、が、私のような者が長らえては、反かえつて諸方に御迷惑、私もまた因果が恐ろしゆう御座います。さらばで御座います、萩江様——」

「あッ」お鳥は身を跳おどらして、再び寄せた、狼の大群の上へ、自分から身を投じようと思いました。が、これも危ういところで、鞍馬に抱き止められました。

「萩江様、どうぞ、殺して下さいまし」

「いや、そんな事はならぬ」

二人は争う弾みに、足を踏み滑らして、もう一度落ちかけましたが、辛くも萩江鞍馬の手が、お鳥の全体重を留めて、小さい枝にブラ下りました。

「お鳥殿、たつて死のうと言われるなら、拙者も一緒に、——手を離そうか」

「いえいえ、それはなりません、助かりましょう。私も助かります」

咆哮する悪獣の大群の顎から僅かわず一尺のところ助かって、二人は漸く梢に還りました。何時いつともなく、東は白んだ。涙ぐましい心持で、二人は犇と抱き合つて居たのです。旧

幕時代に時々赤毛、碧眼の人を見かけたのは、萩江鞍馬とお鳥の子孫では無かつたでしょうか、併し、それも今は昔の事です。

# 青空文庫情報

底本：「野村胡堂伝奇幻想小説集成」作品社

2009（平成21）年6月30日第1刷発行

底本の親本：「百唇の譜」東方社

1951（昭和26）年2月

初出：「朝日」

1932（昭和7）年9月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：門田裕志

校正：阿部哲也

2015年5月25日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。



# 裸身の女仙

野村胡堂

2020年 7月18日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>